



ウィーンの 音楽活動



ムジークフェラインの
ニューイヤーコンサート

ウィーン・フィルの 本拠地 ムジークフェライン

ウィーンは人口が160万人弱だから、意外に小さい街だ。それなのに劇場やコンサートホールは数えるのに苦労するほどたくさんあり、そこではほぼ連日何かが開催されている。音楽の都といわれるゆえんである。

音楽に関係ある場所を、思いっくまに挙げてみよう。

世界の歌手達の検査舞台であるシニターツオパー（国立歌劇場）に、オペレッタの老家フォルクスオパー、ミュージカルのヒットが連続しているテアター・アン・デア・ヴィーンやライムント・テアター、そしてちよつと毛色の変わったところではカンマーオパー。

コンサート会場としてはムジークフェラインの大小2ホールとコンツェルトハウスの大中小3ホール。有名なピアノメーカー、ベーゼンドルファー社のホール、ORF（オーストリア国営放送局）のホール、ヤマハホール、パル・パルファイなどをはじめとす

ミュージクフェライン外観



事務局のグントラムさんとホール全スケジュール表を見る



マットー二館跡

大ホールの柱の意匠は独特である



るたくさんさんのサロン風コンサート会場、国立、市立の音楽学校のホール、そして数えきれないほどの教会etc.:

迷い始めたらどれに行っているのかわからなくなるほど盛り沢山なイベント会場の数々である。

これだけの催し物に人が集まる事実の裏には、やはりそれなりの社会的背景がある。早い話、こういった場所を訪れる以外に、夕刻を有意義に過ごす方法があまりないのだ。

ショッピングを楽しめそうなお店の営業時間は条例で規制されていて、夕方6時になると閉まってしまう。テレビは普通2チャンネルしか映らない。あとは映画を見に行くか、気の合った友人と食事をするぐらいが関の山。いきおい文化の薫りでも嗅ごうか、という気にならざるを得ないのである。

さて、コンサートホールの中でも別格のステータスを持つ「ミュージクフェライン」は、御存知ウィーンフィルの本拠地でもある。

ウィーンには「楽友協会」という世界的に有名な協会がある。正式の名称は「ゲゼルシャフト・デア・ミュージクフロインデ・イン・ヴィーン」というのだが、あまりに長いので普通は「ミュージクフェ

ライン」と呼ばれている。

この会が「アマチュア音楽愛好家の集まり」というモットーと共に発足したのは1812年、日本はまだ江戸時代の事だった。

協会主催の演奏会など当初はヴィルトブレイトマルクト9番地にあった「赤いはりねずみ亭」で催されたが、(ここは北ドイツのハンブルクからウイーンにやって来た

現在の建物が完成したのは18

70年(明治3年)である。テオフィル・ハンゼンの設計による大ホールの音響の素晴らしさは、完成後100年以上の時が流れた現在でも世界でその右に出るものがない、とまで言われている。

ブラームス、ブルックナー、マーラーなどの作曲家達は、まさにこのホールでの響きを想像しながら

ならない。

ロソクの光と単純な暖房器具のもとでは、冷凍庫の中より寒い零下20度ぐらいまで冷え込む事も珍しくないウイーンの冬のさなかにあの大きさのホールの中でじっとしていたら、まず確実に風邪をひく。

風邪といえば病気につきもの、咳、くしゃみ、鼻づまり。コンサートでこれらを我慢するのは苦しいものだ。

ウイーンで鼻水が垂れてきたらたとえ演奏会場でも所かまわずプーと大きな音をたててかんでかわない。ズルツとすするのはもつと下品という事になっている。

ついでにつけ加えておくと、こちらでは鼻をかむのにハンカチを使う人が多い。端からかんで使って使用済みのところは次々に丸めていく。人によっては乾いてパリパリになった所をもんでまた、というのもあるらしいが、これは論外。

いずれにせよ「ハンカチ」と「水つば」はイメージが合成されやすいため、日本的な感覚でハンカチを人に貸すのは、それが洗いたてであれ、あまりスマートな事ではないようだ。

ムジークフェライン・ブラームスホール



大ホールの楽屋にて

29歳のブラームスがウイーンデビューを飾った所でもある)後にトウフラウベン12番地「マットーニ館」に700人程の大きさのホールが完成し、ウイーン音楽界の中心のひとつとして栄えたのである。

第2次世界大戦の戦禍を経た今日では、残念ながらこれらの建物から当時の様子は窺うべくもなくなってしまった。

ら作曲していたのである。

このような大ホールが建設される背景には、ウイーンで音楽が愛され、そこそこの大きさのホールではとても音楽市場の需要と供給のバランスをとれなくなってきた、という事情があったのも勿論だが、それ以外にガス灯による照明や、効率の良い暖房設備が発達してきた、という点も見逃しては